

ぼくとママは 屋根裏に隠れた

作：ロアルド・ホフマン

訳：川島慶子

絵：東裏栄美

ホロコーストを生きのびた小さな子どもたちの思い出——ノーベル賞科学者の祈り



ぼくとママは屋根裏に隠れた

ホロコーストを生きのびた小さな子どもたちの思い出——ノーベル賞科学者の祈り

作　　ロアルド・ホフマン
訳　　川島慶子
絵　　東裏栄美

目次

はじめに 川島慶子	1
日本の皆様へ ロアルド・ホフマン	4
一九四四年 六月	6
一九四三年 六月	13
解放	16
屋根裏のゲーム、一九四三	18
平らな敷石は、いつも変わりたいと願っている	21
限られた視界の中で	23
忘却の黄金の箱	27
にわか吸い玉	31
ふたつのバラ (Rose)	34
死神の凝視	37
ドブネズミのことは	40
これらの詩から学ぶことはあるのか ロアルド・ホフマン	42
訳者あとがき 川島慶子	46



はじめに

これは、二〇一七年に八千草薫・吉田栄作主演で上演された戯曲『これはあなたのもの』（川島慶子訳、アートデイズ、二〇一七）の作者ロアルド・ホフマン（一九三七—）が、その戯曲と同じ主題について書きためていた詩、第二次世界大戦中の本人の経験を綴った詩集の一部です。

ホフマンは劇作家で詩人なのですが、じつは最も著名なのは科学者としての顔です。この人物は、恩師と自身の名を冠したウッドワード・ホフマン則の発見により、一九八一年に福井謙一と共にノーベル化学賞を受賞した、超一流の科学者なのです。現在はコーネル大学の名誉教授で、国籍も住所もアメリカです。けれども、そこに生まれた人ではありません。その上、ホフマンというのは生まれた時の苗字ではないのです。

出生名はロアルド・サフラン。出生地はズウォーチュフ。現在はウクライナ共和国に属していますが、生年の一九三七年当時はポーランド領であった地方都市です。この地域には昔からポーランド人以外の民族が多数暮らしており、ロアルドが生まれた頃はウクライナ人、ユダヤ人、ポーランド人それぞれが住民の三分の一ずつを占めている、といった構成でした。この割合が激変したのは、ナチス・ドイツによるユダヤ人迫害政策以降です。ポーランドを占領したナチスは、ユダヤ人撲滅を図り、「労働するため」と偽って彼らを絶滅収容所へと送りはじめます。

ロアルド少年の一家はこの欺瞞を見抜きます。父親だけが当時一家が押し込まれていた労働収容所にとどまり、母はロアルドを連れてそこを抜け出して、兄や妹たちと一緒に、小さな村に住むあるウクライナ人一家の屋根裏部屋、次いで物置きに潜伏することになります。その建物は村でただ一つの小学校でもあり、その一家の主人は学校の教師でした。こうして、五歳の子どもが大人たちと一緒に、狭い隠れ家十五か月を過ごすのです。この間に、労働収容

所からのユダヤ人脱走計画を指揮していた父親は密告されて処刑されます。隠れ家に行く前に、すでに祖父や親せきたちの幾人かは殺されていました。

やっとナチスが敗北し、隠れ家から外に出ることができるようになったとき、ロアルドは六歳。冒頭の詩「一九四四 六月」にあるように、生まれて初めて「風」が何たるかを知ります。しかし、解放が即、幸せな日常への扉とはならないことは、この詩からもひしひしと伝わってきます。少年はこの後、いくつかの難民キャンプと四つの小学校、四つの言語の間を転々とします。アメリカ移民法の国籍制限のために、死んだドイツ人一家の出生証明書を買ってドイツ人になりすまし、彼はロアルド・ホフマンと名乗ることになります。こうしてこの親子は、ほとんど亡命に近い形でアメリカ移民となったのです。このとき十一歳だったロアルドにとって、英語は六つ目の言語でした。

最終的には世界的な科学者となってノーベル賞を受賞したのだから、まさにアメリカン・ドリームではないか、と思われるかもしれませんが、じつはこれらの詩が書かれたのはノーベル賞受賞からずいぶん後のことです。そしてその詩をちりばめた戯曲『これはあなたのもの』執筆はさらに後であったことを考えると、単純な「ハッピー・エンド」などこの世にはありえないということがよくわかります。

戦争の意味も知らないまま、狭い屋根裏部屋に閉じ込められた小さな子ども。走ることも大声を出すこともできず、同じ年の子どもとの交流もなく、わずかな音にもお



1942



1940



1925

びえながら日々を過ごしたロアルド少年は、それでも大人たちの行動を注意深く観察していました。これは、そんな小さな男の子が見た、戦争中と戦後の景色です。

このときの少年にとっては、善も悪も意味を持ちません。本書にあるものは、単純な二項対立の成り立たない世界で、矛盾と絶望の中、それでも一握りの希望を胸に抱えて生きた人々——生き抜いた人々と生きられなかった人々——を謳った詩です。ここからみなさんが小さな子どもたちの心の声を聞き取っていただければ幸いです。それはもしかしたら、爆撃も絶滅収容所もないこの日本でも、常にどこかから聞こえてくる声なのかもしれません。

川島慶子



1992



1949

日本の皆様へ

日本の皆さんにお話ししたいことはたくさんあります。というのも、私は日本とはひとかたならぬ因縁があるからです。でも、これらの詩に描かれたことが起きていた頃、日本についてはほとんど何も知りませんでした——あのとき、家族と私は先の戦争の真つただ中にいたのです。一方日本では、人々は大いなる災厄を被り、他国にも苦しみを与えていたのですが、戦争が終わって、私は日本についてたくさんのことを学びました。それも最高の方法で、です。というのも、私はコロンビア大学時代にDonald・キーン先生の授業に出ていたからです。読者の方には、化学専攻の学生だった私が、どうして日本文学の授業に出ることができたのか、どんな教育システムがそれを可能にしたのか、ということにも興味を持っていただけだと思えます。やがて科学そのものも、一人の日本人、それも京都のすばらしい化学者である福井謙一との出会いをもたらしてくれました。私たちは友人になり、私は福井の弟子と一緒に仕事をするまでになったのです。私は詩や劇も書くようになりました。その中から、母と自分のことを書いた一番重要な作品が日本で上演されました。私は日本とはこんな風に、そして他にも色々な縁があるのです。

本題に入りましょう。川島慶子によって繊細に翻訳され、東裏栄美の美しいイラストで飾られた本書の詩についてのお話です。詩というものは、あまりにもオリジナルの言語に依存しているので、翻訳することなど不可能です。音、構文、特定の語が想起させるもう一つの意味。それは元の言葉を離れては伝えることができません。それでも詩は訳すことができるはずです。翻訳してゆく過程の中、その詩を深く読み込んでいく内に、翻訳者は詩人との強い一体感を持つようになります。自分とは別の人間と接近してゆく作業の中で、翻訳者は否応なしに、深く耳を傾けることを身に着け、作者と共に歩んで行くようになるのです。



*「はじめに」でも少し述べたが、ホフマンの戯曲『これはあなたのもの』は日本で上演された。最初の上演は名古屋工業大学創立二一周年記念のイベントとして、二〇一六年の秋に名古屋工業大学の講堂において四日間上演された。演じたのは地元の劇団シアター・ムーンである。二度目の上演は一般の劇場においての公演で、二〇一七年の春から初夏に、主演八千草薫・吉田栄作、演出鶴山仁、主催地人会新社により、東京の新国立劇場をはじめ関東から関西までの複数の劇場で上演されて好評を博した。またこの公演はその夏にNHKでも放映された。

一九四四年 六月

—

その女は兄たちを先導し、溝を超えてゆく。兄は女にもたれかかっている。筋肉が萎え、まともに歩けない。なにせ十五か月も屋根裏部屋に隠れていたのだから。

雨はベレジヤニの近くでロシアの戦車をぬかるみにはまらせた、そして女とその兄たちを匿ったウクライナ人はこう言った
歩いて行くんだ、このびしょ濡れの初夏の大地を横切って と、

この家から、屋根裏部屋から遠く離れて。ドイツ軍はまだ村に残っている、そして村人たちが言うには 奴らは嗅ぎつける
ユダヤ人が隠れていることを、と。だから或る夜



ユダヤ人たちは 靴をぼろきれでぐるぐる巻きにして出発したのだ
ロシアの戦列に向けて。女は

疲れていた、でもそのとき男の子が、

女の子ども、六歳になる息子が歩けなかったのだ

(その子は泣いただろうか?) 女は子どもを背負った。男の子は
生まれてはじめて風を知った。屋根裏ではレンガがひとつだけ、
真横に壁から抜け落ちていた。

その子はそこから子どもたちを見ていた

外で遊ぶ子どもたちを この長四角ながしかくのマスクを通して。

子どもたちは平べったく見えて、いつも、すぐ

目の前から飛んで行ってしまふ。クスクス笑いは

こだまするけれど、風が吹いてくることはなかった、

だってレンガの穴はとても小さかったから。屋根裏には

男の子が行ってはならない所があった(板が

ガタピシいうような場所だったから)。袋にいれた乾燥豆は

その子には丁度いい枕になった。

だからその子が手を伸ばして 風を

抱きしめようとしても不思議はない、でもそのとき大砲が

男の子から風をもぎとる、母親は

よろめき、その子はしっかりとつかまらなければならなかった

母のコートに。生け垣は丘に向かって生い茂り 波打つように揺れていた、それで

一行は、平らな畑を横切るしかなかった、兄のひとり

パルチザンと一緒にいた兄が

こう言った。銃を持っているから

弾は四発ある（でも、前には五発あった）、と。だから

みんなはゆっくり進んだ、足は泥土に沈み、

隠すべもなくその身をさらして、道に向かって

降りてゆく、ロシアの戦列に向かって。



戦車隊（神様 赤い星に出会わせてくれてありがとう）がわだちをつけながら道を進んで来たので一行は飛びのいた。私たちはユダヤ人だ、

みんなはトラックに向けて大声で叫んだ。行きたいんだ

ズウォーチュフに。一台が止まった、ロシアの兵士たちは

ゆっくりと車の脇を乗り越えてやって来た、

毛布にくるままっている者もいて、ウォッカとキャベツの匂いがした。

兵士は男たちには手巻きのたばこを、

男の子には固いキャンディをくれた。ひとりが母親に話しかけた

イディッシュ語で、俺はオデッサの出なんだ、そして引っ張り出す

くたびれた一冊の本を、ほら、俺のペレットだ*

いつでも持っている。兵士たちは寒さに体を小さく丸め、コートは

はためき、道端で小便をしてユダヤ人たちに言った ご一同

登ってきていいよ 行けるとこまで乗せてってやるよ。

他のみんなは眠ったけれど、男の子はじいっと見ていた



トラックの脇を　そのとき車は急に傾く

爆弾が開けた穴の周りで、トラックは戦車を先に通すために止まった。と、男の子は足を見つけた

溝の中に、そして身体の方は曲がっていた

命のないものに特有の体で、だから思った。きっとドイツ人だ。

その子はカチューシャを取り付けたトラックを見た、乗員が掃除する
チューブ・ラックを、そして男の子は思い浮かべる

砲弾が夜に発射されるころを。と、人間の身体がもうひとつ、二本の

腕、ヘルメットがひとつ。ぬかるみに血は流れていない、ただ

兵士たちがパンクしたタイヤのことをロシア語で罵っているだけ

灰色の空の下。母親に呼ばれてその子は戻った。

三

ロシアのトラックは行ってしまった

町から五キロの所で。

一行はひとりの農夫から　ミルクとパンとキューバサ・ソーセージを買った

農夫は胡散臭そうな目をユダヤ人たちに向けたけれど、ちゃっかり受け取った金一

貨を。その子はむりやり飲み込んだ

ミルクを、ミルクは苦手だった、

一度も飲んでなかった、この三年というもの。みんなは納屋で眠り、歩いて町に入った、次の朝。ひとりのポーランド人女が

自分の家の玄関先の掃除をされていて

連中に気づいた。女は顔をしかめた

まあ、ローゼンの家の人たちじゃないの、つまり奴らはあんたたちを皆殺しにはしなかった、というわけね。みんなの家は残っていた、それは一番大きな家だった

ヤギエヴォ通りで。

屋根だけが砲弾でやられていた。

家のドアをノックしたら、男がひとり出てきた。俺たちはここに住んでるんだ俺たちはてっきり、あんたたちは……戻ってこないよ。家具は

みんな無くなっていた、でも型打ちされた、

エナメル陶器や琺瑯製のタイルでできたストーブだけは残っていた



どの部屋の隅にも。屋根裏部屋に上がって、大人たちは写真を探した
隠しておいた写真を。男の子は、母親の

泣き声に気付いた、赤ちゃんの写真が

(これ僕？ これ僕？) あたりに散らばっていた。

そしておなじ男の写真が何枚か、日当たりのいい公園で乳母車を押ししている男、
その子の母親と手をつないでいる男の。

*イディッシュ語とは、東・中欧のユダヤ人たちの間で話されていたドイツ語に近い言語。ユダヤドイツ語とも呼ばれる。

**イツハク・レーブ・ペレツ（一八五一—二一九一五）はポーランドのイディッシュ語作家。

***カチューシャとは自走式多連装ロケットのこと。

一九四三年 六月

他の人たちはずいぶん経ってから戻ってきた

戦争が終わって、だから僕は心の底から信じていた、父さん、父さんは死んでなんかいないと。

あいつらが父さんを町中引き回したとき、

たぶん父さんはあいつらを振りほどいて、

走った。あいつらは他の誰かを撃ち殺したんだ。

父さんの代わりに。ある日

父さんは帰って来る、

やつれはてて、ぼろぼろになって、冒険談を話すために

隠れていた湿地帯から。

ある日父さんは戻ってくる、

ロシアからの長い道のりを歩いて。

そして父さんが僕を失望させたとき

父さんが戻ってこなかったとき、僕は母さんに頼んだ

もう一度話して と

何が起こったのか、

そして僕は念力で呼び覚ました

父さんを密告したユダヤ人の心を、

ああ父さん、

父さんが隠した銃を、

父さんの脱走計画を暴露したあのユダヤ人。

父さんがどんなに勇敢だったかを　僕はその男に話した。



これが上手くいかなかったとき、父さん、

僕は自分がパワーを持っている夢を見た、

僕はウオッカを注ぎ込む

自分の血液の中に、僕は遅らせるんだ

ウクライナ人の警官の動きを

父さんが親衛隊の騎兵に突進したとき銃を引き抜いたあの警官の。

そしてこれも上手くいかなかったとき、

ああ父さん、

僕はよろい戸を閉めて

人々の顔を横に向けさせた

無理強いされた人々

広場でその光景を見るようにと、
みんなが父さんの崩れ落ちる姿を見なくてすむように、
みんなが父さんの言葉を聞かなくてすむように、
二度の呼び声を、僕の母さんの名前を。

解放

ある日守衛たちは走り去った、そして

爆撃はひどくなっていった、男

チエルノフツィーからやってきた男が 收容所の

残飯おけを空にして 血を求めて奥へと進んでいった。

男は ぎこちなく牛を解体している

連中を見つけた。そいつらは男を押しつけた、けれど

血がほしいだけなんだと

男が言うと、連中はおけに受け止めさせてくれた

牛の首から噴き出す血を。男は

板を持ち上げ、取り出した、粘

土の像を。男は円の中にその像を置いた

泥の上の、一体の女の像と子ども像を

その円の真ん中に、それからその周りを歩いた、

男は肘まで



おけの中に腕を浸し、血を投げかけた
粘土の人形の足に。

ところが像が動かなかったので、男は

チエルノフツィーから来た男は像の名前を呼んだ、

一つずつ、そしてシマー*。

さかさまに、それから一心不乱に、塗りつけた

たくさん血を 不細工に作られた

像の顔に、像をひっくり返して、そうして

挙句の果てにかすれ声で神を呪った

イディッシュ語とルーミア語の両方で。

* ユダヤ教の信徒信条。「シマー、イスロエル、アドナイ……」など。これは、ゴレムを作るための決まり文句。

屋根裏のゲーム、一九四三

ユニウフからサンフランシスコに行くにはねえ、

こうするんだよ、ママ。まずね

ママはあの道を歩くんだ

教会の近くで行き止まりになってるあの道を、そこですこうし待つ

ママを乗せてってくれるお百姓さんが来るのを、

ちよっとのお金で、あの大通りまで、

ママが 父さんがそこに

橋をかけたのよって言ってた大通りまでね。それから待つ

バスを。ズウォーチュフで乗り換えるんだ

汽車に（行けるかも

サビナおばあちゃんのところ、ナチスがどこかに行っちゃったらね）

リヴォフ行の汽車に、そこで何時間か待って、乗り換えるの

ワルシャワ行きにね、そこからまた汽車でグダニスクまで行くんだ。

そのあとママは船に乗る、出航するんだ
ダンチヒ湾で、バルト海にあるよ、

エーレスンド海峡、カテガット海峡を通過して、それから……

三つ目の海峡の名前忘れちゃった、あの辺

デンマークの辺にあるやつ、けどさあ省けちゃうかも

キール運河を横切って。それから出るの

北海に、イギリス海峡を通過して、

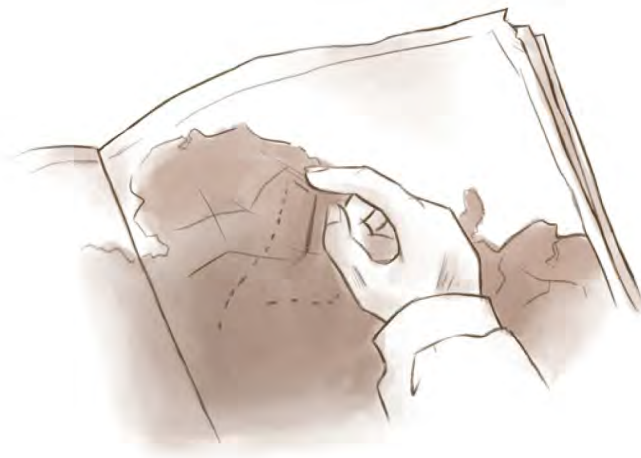
大西洋に出るよ。それでね、

僕たちには時間がたっぷりあるから、この屋根裏にいるときみたいに、
遠回りで航海することもできるんだ（聞きたい？）
通りすぎていく島の名前をゼーんぶ

聞きたい？ ママ

南アメリカの周りで、まっすぐ通り抜けるんだ

マゼラン海峡を、ティエラ・デル・フェゴ近く、そして上がっていく



チリのながい海岸線を　そしてこの島、
ロビンソン・クルーソー島——おねがいママ、
またあのお話を読んでね——もっともっと北に進んで

パナマを通り過ぎて、運河があるから
時間が節約できるよ、でね、まだ北に上がるの
このながいニワトリの足

メキシコから突き出している足を上げて、カリフォルニアまで行くの。さあ湾だよ、
サンフランシスコに着いた。どうだった？
ママ　僕ちゃんとできた？　ママ。

サンフランシスコの近くで、一九八九年

平らな敷石は、いつも変わりたいと願っている

僕たちは戻る、母さんと

僕は、ズウォーチュフに戻る、

そこではウクライナの少女たちが

赤と黒の刺し

繡で飾られた服を着て歌を唄い、

パンと塩を振舞ってくれる、

だってぼくたちはお客様だから この人たちの

町の。そうだろうか？ けど

ぼくたちは見おろす、おだやかな

六月は十二月に変わり、

雪が降り始め、

ひっかき傷を縁取る



敷石についている傷を

それでひっかき傷は

へブライ文字になる。僕たちは

地雷原の中に立っている。

母さんは

雪の中ではものが良く見えない。

限られた視界の中で

屋根裏部屋の窓から男の子は

外で遊んでいる子どもたちをみつめていた、けれども

子どもたちはいつも走りまわっていて

すぐに窓枠から消えてしまう。

それに雨風にさらされたよろい戸が

目の前の景色を切れ切れにしてしまう、だから

その子はしょっちゅう分からなくなった

イゴールが蹴ったボールが

(その子は窓の外の子どもたちが

イゴールの名前を呼ぶのを聞いた)どこまでいったのかが。

男の子はいつも動いていた、

よろい戸の ひとつの板から別の板へと、



外の世界を　なんとか
見ようとして。その子は先生

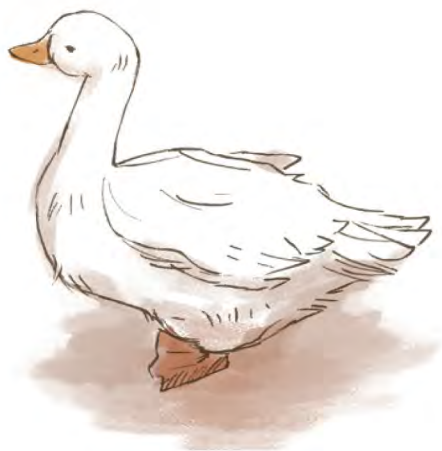
デューク先生*の奥さんが籠を持って出かけて行って、
それから戻ってくるのを見た

奥さんは卵を持っていた。卵のにおいがしたのだ。
一度ふとちよのガチョウを見たことがある、

囲いから逃げたんだ、まぬがれた
虐殺されずにすんだ、と男の子は思った。一度

ひとりの女の子を見た、女の子は
刺繍がついたカルパチア地方の

チョッキを着ていた。男の子には空が見えない、
よろい戸の板は下向きにとりつけられていたから。その子には



学校の庭しか見えない、
いっつも同じ庭、ただ

雪が泥にかわり 泥が
草になって また雪にかわる。ずっと後になって

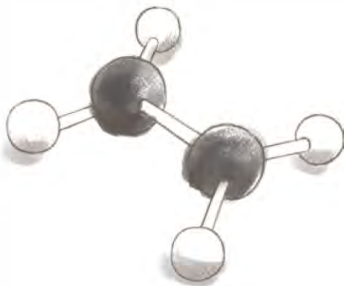
男の子は成長し、やってきたのだ
アメリカに、そこではこの子は

とても勉強のできる生徒だったし、みんなが褒めてくれた
物事を注意ぶかく見ていると。

男の子は先生となり、よく見るようにとみんなに教えた
ひとつひとつの歪み

分子の歪みを、なぜ、
鉄の上のエチレンの分子が

あんなふうに変むのか、なぜ別な風には歪まないのかを。



この世界で、大人になった男の子は考えた、そこには

何か理由があるはずだ、と。彼の書く詩は

夢見るようなものではなかった、その反対にいっぱいつまっていたのだ

むしゃくしゃする

ことが。もっと後になって、かつての男の子はじっと見つめる

お母さんを、お母さんの眼は

衰えてしまって、首を動かしながらものを見るようになっていた、それは、

ああそれは、あの小さな男の子が外を見るためにやっていた動作だ、ほんの少しだけ

見るために、一番小さなかけら

きらめく光のかけらを

それは閉じ込められた、私たちの世界の光。



*デュークとはロアルド一家を匿ってくれたウクライナ人一家の苗字。前書き参照。

忘却の黄金こがねの箱

—

大きな部屋が造られた

式典のために。私たちは

そこに入った。忘れるため、終わらせ

忘れるために。めいめいが

金色の箱を持ってくる、

あなたも、そして私も。ある人たちは持ってくる

ふたつ、またはみつつも。それぞれの箱には

ひとつの巻物、ひとつの記憶

記憶はセルビア語で書かれている、あるいは

イディッシュ語、アルメニア語、

トルコ語、中国語、フツ語、
クロアチア語、そしてウクライナ語で。

このために 私たちは準備してきた
一年間、毎日書いてきた

それ以上できなくなるまで
書くことができなくなるまで、でももっと書いた、

次の日にはもっと。私たちは積み上げる
箱を 真ん中に

部屋の真ん中に、炎が上がる手はずのその場所に。
私たちは座って、そして見ている

箱が燃えるのを、一晩中燃えつづけるのを。
世界中で、

六日間にわたり、人々は燃やす



忘却の 罪のつまったその箱を。

二

マウナケア山の上

大きな島の上で

ハワイの島、溶岩―

流は印をつけている

きちょうめんな茶色の印を。

女神ペレーの一九九七年の噴火は今でも

かすかな匂いがする 二酸化―

硫黄の。一九九四年の黒い

燃え殻は私の靴を切り裂いた、
でも六年ほどがすぎれば、

そこには花が咲く、
五十番目の二つとない肥沃な大地に。

三

五十六年前 やつらは
あなたを殺した、父さん。どうやって

満たすことができるんだろう？ ぼくの黄^こ金^{がね}色の
忘却の箱を、あのとぎ

やってもえなかったのに、ぼくは五歳で、
父さんの腕に抱いてもらえなかったのに。

にわか吸い玉

静かな炎がそれを思い出させる、どんな風

ある夜、デュークが伯父さんを屋根裏に連れてきたかを。

森から戻ってきた強い伯父さん

(銃を何丁か父さんにくれた伯父さん)、

僕のフロムチー伯父さんは、崩れ落ちた、意

識を失って熱を出し、八日の間寝たきりだった。そこには

薬は無かった、あるのはハーブだけ、そして

信用できる医者もいなかった、僕たちは隠れていたのだから、

母はデュークにガラスの入れ物を頼んだ、

それからアルコール・ランプを。みんなは僕を寝かしつけようとした、

でも僕は見ていた。母さんが伯父さんの背中をむきだしにしたこと

ガラスを熱したこと、そのうちふたつが砕け散ったこと、

それに今までに見たこともない母さんの顔も



母さんは伯父さんの背中にガラスを置いた、ジャムの瓶、大きなガラスのコップ、伯父さんは悶えた——熱く焼けていたガラス、

ヌニャ叔母さんが伯父さんにさるぐつわをかませる、

小さな男の子はランプの明かりの中で見たのだ

ガラスの中の上ってくる伯父さんの血と肉を、赤いミミズ腫れを、

そしてフロムチー伯父さんは倒れこんだ、汗をかいて、ほとんど死んだみたいになって。

母さんは声を上げて泣いた——僕を抱きしめて——これが

母が自分にできるとわかっていた たったひとつの治療法だった、

だから母さんは伯父さんを傷つけた。戦争が終わってずいぶん経ってから

僕は素敵な吸い玉のセットを見た、カップは木箱の中できらめいていた

エジンバラのラベルが貼ってあって、大小とりどりのサイズがあった——

どれもが小ぶりだった（僕の背が伸びたのは確かだけれど）

あのととき母さんに与えられたものより、

そこにはカップを掴むためのトングまであった。けれど、あのととき母は何一つ持っていなかったのだ、

手慣れた化学者の丈夫な手も。戦争が終わって、ニューヨークで、フロムチー／フランク伯父さんは固いキャンディを作る小さな工場を経営した、

伯父さんは僕に見せてくれた 着色料が

溶けた砂糖に混じり合い、甘いスパゲッティが

オープンから押し出されるのを、それを手で糸状にする

ベネチアガラスのミレフィオリ^{*}のように、温かいうちにカットするために。

僕は伯父さんに聞いた「怖くない？

火傷するのが。」伯父さんはただ微笑むだけだった。そのあと

伯父さんは相棒と揉めた、そしてある夜、まわりに燃え

移るような火事が起きて、伯父さんの工場は燃えた。キャラメルの

火なのかな？ 僕は思った。それに伯父さんのあのときの傷はどこにあるんだろう。

*ミルフィオリとも言う。ヴェネツィアのガラス細工の技法のひとつ。日

本語で千の花（お花畑）という意味。日本の飴細工の用語でいうなら、金太郎あめのような技法。つまり、どこで切っても同じ模様になる。ただし切り口は人間の顔でなく、花のように見えるのでこの名がついた。

ふたつのバラ (Rose)

ふたつのバラがポーランドの町に咲いた

へブライ語ではその娘たちの名は

シヨシヤナ (Shoshanah)*、スザンヌ (Suzanne) と呼んでしまうのは、
ユダヤ人にとってはやりすぎだ、

だから一人はローザ (Rozal) で、もう一人はロイザ (Roizal)、

どちらもリーゼル (Reyzel) だ。一方の兄が

結婚した もう片方の

姉と。シヨシヤナット

ヤークブ (Shochanat Yakov)、ヤコブ (Jacob) のバラだ、

娘たちは両親にとって薫り高い花だった。

とげがあったとしても、もう誰もいない

そのことを覚えている人は。

戦争が来た。ある暑い

夏、ローザは立っていた、

両親と共に七日の



間、ズウォーチュフの広場に。
乗り物を待って。

ローザの兄、僕の父が、
通りかかり、妹たちの

水を乞う声を聞いた。守衛らは
銃をかかげた。父さんには妻と
子どもがいる。父は歩き続けた。

しらみを調べると言って守衛は娘たちの服を脱がせた。

ローザは裸で立った、桃色になって
自分の父親の瞳の中で。

ポーランドの庭にバラは良く
茂った 戦争の最後の春。

ロイザと友だちは横になって身を潜めていた
納屋の中、かびの生えた毛布の中、

その臭いにむせながら。しばらくの間、
二人を匿っていたウクライナ人の男は
キェウバサ・ソーセージやパン、



古びたリング、水を運んできた。男は運ぶのを止めた、
娘たちは弱ってきた、そうしてある日、

娘たちができないと分かった時

もう走れないと分かった時、男は警察をつれてきた。

すべての花はしおれる。すべての茂みは枯れる。

だがこんな風にはない、切花としてじゃない。

*Rose, Reyze, Roiza, Reizel, Roize, Reysele は、ヘブレイク語に由来するヘブライ語の女性名。ヘブライ語ではバラは Shoshana とあり、それがラテン語／ギリシヤ語では Susannah となり、英語では Suzan, Suzanne となる。

死神の凝視

母が言う。「毎日、

あたしたちは死と向き合っていた」

母は自分の英語を誇りに思っている。

「怖かった？ 母さん」

「ええ」そして母は微笑む、

病人には珍しい微笑み。

「死神は目をそらしたの」

僕はそこにいた。でも、小さな子どもには

見えなかった。いま、僕は心の中で思い描く

僕の母、母の兄たち、

ヌニャ叔母さんと僕、屋根裏部屋の中での、

僕たちの長く暗い夕べ、
もしも デュークの家の近くに住む連中が

ぼくらの灯りをみつけたら？ ほら、死神が

馬に乗ってやって来る、小さな村のざわめきの中に、
死神は、パシッと音を立て、皮のピストルケースを下げ、
鞭を持ってやってくる、木の枝を

はじきとばしながら、仕事をする
リストにそって巖かに、
緑の大地から虫を取り除きながら。

「死と向き合っていた。」死神の放浪が

止まる、デュークの学校の前で。

建物の中、母たちは聞く 死神の蹄の音が、

止まるのを。死神はその人間たちを見つける、



ふたつの壁をこえて。そしてみんなは

死と向かい合う。だが、そのとき

死神は、長靴を履いて、拍車やらなんやらで身を固めた死神は、

腐りかけたキャベツスープのような臭いを嗅ぐ、

その臭いで死神は「死者が、汚物にまみれていたことを思い出す。死神は
目をそらす、選り好みする死

そして戻ってくるのだ

次の日に。

ドブネズミのこぼれ

ひとりの女が鉄格子の下に閉じ込められていた。

女は静かに話しかけてきて、助けを求めた、

助けなければ。けれどゆっくり動かさないとだめだ、だって

女はそこで膨れ上がった、からだ身体が

下水管のカタチになってしまっていたから。骨は曲がっているに違いない

そこからただ引っ張り出すこともできない。筋肉を

マッサージしてやらないと。あのとき、僕たちが立ち去る前

一九四四年の六月、デュークのところから歩いて出て行くときに

ソ連軍の戦列に向けて、みんなはマッサージしたのではなかったか？

男たちの足を。より強い女たちよ？

男たちの両足は腫れ上がっていた、歩き回るだけの場所などなかったのだ

僕たちが隠れていた物置きには、

その下を掘って作ったえんぴ掩蔽壕にも。

この女をゆっくりと引き上げなくては、油をたらして

女の周りに、ウィンチを使って、時間はある。

お願いだから女に話しかけてやってくれ、どうやって入ったのか

そんな下水管の中に、どうして子どもたちはあんたを置き去りにしたのか、





格子を押し上げることのできる機会があったのか、と。
女に聞いてやってくれ みんなはどんな食べ物を投げてよこしたのか。
どうやって今まで辛抱できたのか。あと、誰か
他に下水管の中で暮らしていた人はいたのか、そして
ドブネズミのことを学んだかどうか、と。そのあいだに、ぼくは助けを呼びに行くから。

これらの詩から学ぶことはあるのか

おしまいに、これらの詩についてみなさんと一緒に考えてみたいと思います。科学者らしく、リストを作ってみました。私が言いたいのはこういうことなのです。

一、このようなことは二度と起こしてはなりません。じつは詩の後ろにはもう一人子どもがいました。密告を恐れた伯父や伯母は自分たちの娘を農家にあずけていたのです。なぜなら、二歳のその子は、隠れ家の屋根裏部屋で声を立てずにおとなしくしてはいられなかったから。三歳だけ年上だった私は、おとなしい子でした（戦後伯父たちは娘を探したが、見つからなかった）。こんなことが二度と起きないように、私たちは努めなければなりません。そして、起こしてはいけないのは、何もホロコーストだけではなく、私たちは努めなければなりません。ヒロシマやナガサキに落とされた原子爆弾もそうです。

二、すさまじいサバイバルをしたこと、それだけで十分なのです。そう、よくよく考えてみれば、私たちが生き延びて、他の多くの人々が死んでしまった理由を見つけるのは難しくありません。両親が政治的な状況を正しく把握していたこと、しかも私たちが匿ってくれる善良な人を見つけることができたこと、父の職業（土木技師）が幸いしたことなど。でも、最終的には……運です。生き延びたことを申し訳なく思う必要などないのです。だからどうか、どうか、苦しんだけ強くなるとかいう、その手の変にロマンチックな考えなど持たないでください。生き延びたこと、それで十分なのです。

三、群衆、軍隊、権力、こういうものは私たちににとって良いものではありません。それらはひとつの社会構造です。しかもどういうわけか、個々の人たち——大抵は男なのですが——が他人を傷つける行為に走らしてしまうもの

なのです。落ち着いて考えれば、自分ひとりでは絶対にやらないような行為に人々を走らせてしまうのです。悲しいことに、ヨーロッパのユダヤ人に降りかかったこの手の忌まわしい出来事は、どこにでも起きる可能性があります。戦争は無慈悲な状況を作り出し、そこで善行を行うことを非常に難しくします。平和なときに倫理的であることは簡単ですが、争いの中で同じように行動するのは難しい、とてもとても難しいのです。でも、そういうと努めなければなりません。

四、個々の善行と、集団的な悪行が同時に存在することは可能です。直接的か間接的にかは別として、大勢の人々が殺りに手を染めていて、別の人たちがいやいやながらそれを受け入れていたからといって、そこに一人でも良心のある男か女が存在する限り、その集団を断罪してはなりません。それがドイツ人であれ、ウクライナ人であれ、です。

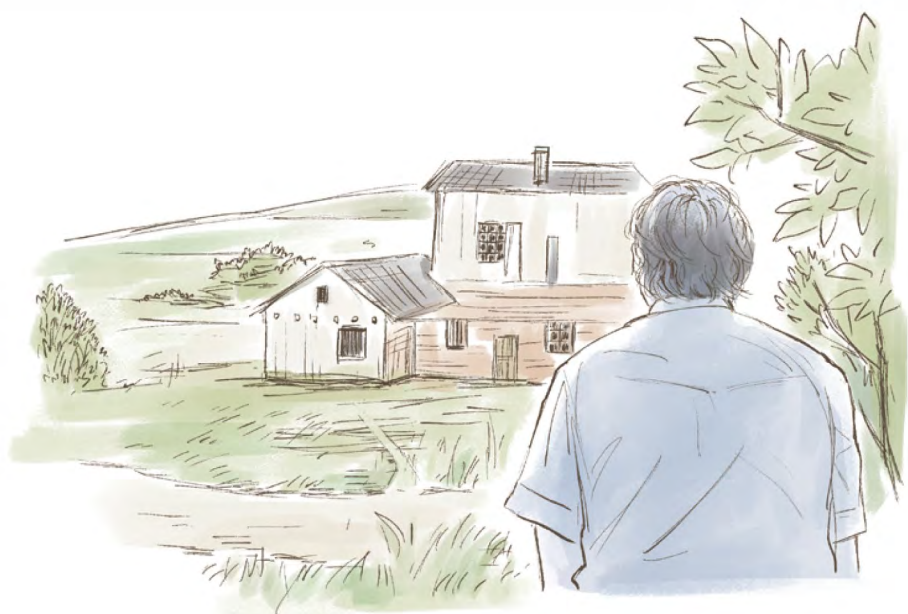
五、人間が同じ人間になした害悪を覚えているということ、それは恐怖を伴いますが必要なことです。そしてひとつだけ確かなことは、一つの苦しみが別の苦しみを与えることで、つまり仕返しすることで帳消しになるような、そんな心の帳簿などどこにもない、ということなのです。同時に、善行を行うこと、自分の命を賭しても他人を害したりはしないということ、こういう行為はその人が存在する時空を超えて響き渡ります。というのも、こうした行為は別の人に、同じような良心的行為をする勇氣を与えてくれるからです。その人たちの善行の記憶は、あの、人間に対する楽観主義、私たちがニュースを聞いたりするときに、つい不足しがちになる、人生の必需品であるこの楽観主義を持ち続けるよう、私たちを導いてくれるのです。

最後にひとつ付け加えたいことは、それでもこの本は教科書でも教訓集でもないということです。これは詩選集です。この詩の内容は、一部は私の生の記憶なまから来ているのですが、別のところは、あの恐ろしい時代に何がみんなを動かしたのだろう、という私の想像から生まれたものです。母や伯父叔母たちと一緒に隠れていた学校の校舎での

ことに思いを巡らせて。私は、ほんの少しのことしか覚えていません。たくさんのことを忘れてしまいました。もっと覚えておくべきだったのか、あるいは忘れてしまった方が良かったのでしょうか。

母と私は生き延びました。けれども、私たちが住んでいた町の四千人のユダヤ人のうち、生き延びたのはたった二百人です。こうした死者のためにも、私は自分の不十分な声で、できうる限り穏やかに、語っているのです。

ロアルド・ホフマン



訳者あとがき

はじめは、『これはあなたのもの』の最初の稽古というか、第一回の本読みでの、エミール役（ロアルド・ホフマン自身に当たる役）の吉田栄作さんの一言だった。二〇一七年四月のその日、台本を読んだ吉田さんは私にこう言ったのだ「これ、戯曲のままでもいいけど（『これはあなたのもの』は公演半ばの六月一日に、アートデイズから出版される予定だった）、エミール君の話は絵本でもいけますよ。なんといっても、日本は世界一の絵本出版国なんだから」。私は驚いた。日本が世界一の絵本出版国？ 絵本のさかんな国というと、まさきに北欧などが思い浮かび、まさか日本がそんな地位にあるとは知らなかった。

確かにエミール少年の話は絵になる気がした。一日中、ほとんど真っ暗な屋根裏部屋の中で、母と二人で息を殺して生きる五歳の少年。でもある日、ついに戦争が終わって、外に出る。少年はアメリカに渡り、最後にはノーベル賞科学者になるのだ。見事なハッピー・エンドだし、絵本にいいのではないか。それでホフマンにその話をする、「戯曲を書く前に、こういう詩を書いて」と言っ、Roald Hoffmann's Poems on Wartime Themes と題する未発表の詩のファイルを送ってきてくれた（現在これの一部は最新の詩集 *Roald Hoffmann, Constants of the Motion, Loveland, Dos Madres, 2020* に収録されている）。そこには戯曲にちりばめられた詩の原型となったもの他にも、たくさんの作品があった。量にすると、本書の倍以上になる。私は特に冒頭の「一九四四年 六月」に引き寄せられた。

それは『これはあなたのもの』では描かれなかった部分、「解放の時」を綴ったものである。生まれて初めての風を感じる少年。懐かしい我が家への帰還。でも、そこにはすでに別の家族が入り込んでいて……。最後に、わが子の赤ん坊の時の写真と、惨殺された夫の写真を見つけて涙を流す母。夫の死を知らされたときでも、隠れ家の中で歯を食

いしぱり、息子の前では決して泣かなかった母が、他人が住み込んでいる荒れ果てた我が家の中で見つけ出した写真の前で、ついに抑えていた感情を爆発させる。読み返すたびにたまらない気持ちになった。そのときの母の気持ち、声を上げて泣いている母を初めて見た、父の記憶のない子ども。赤ん坊の写真に「これ僕？　これ僕？」と思いながらも言葉にできなかった六歳の男の子。

ホフマンの承諾が来たので、前に『これはあなたのものの』の簡易製本の表紙絵を描いたイラストレーターの東裏栄美といっしょに絵本製作を開始した。ただ、いざ始めてみると、それは簡単なことではなかった。もちろん戦争をテーマにした絵本は巷にたくさんある。いわさきちひろの『戦火の中の子どもたち』（岩崎書店、一九七三）などは、傑作に数えられる一つだろう。ただし、それは最初から挿絵がつくことを想定して書かれた文章であり、子どもが読むことを前提に選ばれた言葉である。ホフマンの詩は違う。特にこの、戯曲より前に書かれたものは、詩のための詩であって、ましてや子どものために書かれたものではない。

要するに、言葉を子ども用にすると、もとの詩の雰囲気をこわしてしまうのだ。日本語の場合は、漢字の使い方とも問題となる。読者として想定する子供の年齢は？ その年齢で習っている漢字は？ そんなことを考えていたらいい日本語にならない。ひらがなばかりだと、見た目も変だ。それに、屋根裏に閉じ込められている母子、という設定には動きがないので、当初考えたよりもずっと、絵本に向けた場面を選ぶのが難しかった。

けっきょく「子ども向けは無理」という結論になり、「子どもでも読みたければどうぞ」というスタンスに変更し、入れ込む詩の量も増やした。子どもだって、こっそり親の本を読むこともある。わからなければそれでいいではないか。わからないけど、なんだか不思議な世界だったな、でいいのだ。というか、こっちだってそんなものである。実際、詩の翻訳というのはとんでもない仕事だった。英語力の問題もあるが、そもそも自分が詩人でも英文学者もないのに、詩を訳すというのは暴挙に近い作業だった。やはり『これはあなたのもの』の頃から、なにかと英語で助力を

頼んできた、アメリカ留学経験のある、広報・コミュニケーションの専門家左近充ひとみに色々相談したが、二人でいくら考えてもよくわからないところがいくつもあった。

仕方ないので作者に聞くことになるのだが、ホフマンの答えもまた、翻訳を簡単にしてくれるものばかりではなかった。詩は俳句などと同じで、なにもかも説明してあるわけではなく、ぐっと凝縮した言葉の中にひとつの世界が表現されている。しかし、それでは具体的なシチュエーションが全然わからなかったりする。たとえば「一九四四年六月」で、隠れていたユダヤ人たちが故郷に帰るときに横切る「砂」を、私たち三人は「草原」や「野原」のようなもの、つまり自然のままの草の生えた平たい土地だと思っていた。ところがホフマンに聞いたら「あのあたりはソ連の朝食供給地帯と言われ、大麦、小麦、ライ麦の畑になっていた」と言うではないか。つまりユダヤ人たちは広大な麦畑の中を突っ切って行ったのだ。天然の草地ではないのである。とても日本人には想像できない光景、と三人ともため息をついた。しかしそれを説明としていちいち詩に盛り込むと、リズムも何もなくなってしまふ。注を大量に付けるもの白ける気がした。めいめいに想像してもらおうしかない。

ホフマンに質問していちばん仰天したのが「死神の凝視」についてだ。「あれを書いた時はパウル・ツェランの『死のフーガ』が念頭にあった」というので、問題の詩を見たら言葉を失った。ほかの二人にも詩を添付したメールを回して、「もう、何と書いていいかわからない」と書き添えた。私たちは、自分が詩をよくわかっている人間だとは思っていないかったが、まさかこんな詩がこの世にあるとは――、いや、この手の詩と自分たちが関わっていたとは夢にも思っていなかった。ツェランはシュールレアリストの詩人だから、「ダリの絵が詩になったわけね」と考えれば、まあ、そんなものかという気もしたが、ではツェランの詩が腑に落ちるのかというと、そういうわけではない。これはえらいこっちゃと改めて思った。そこで『これはあなたのもの』の時にもお世話になった英文学者の有為楠泉先生に助けを求めた。

ここで言われたことでますます私は驚いた——「詩においては、翻訳の改行をできるだけ原文のそれと合わせるこ
とが大切」。日本語と英語では文法が違うので、たとえば動詞と目的語の順番が変わる。英語のままに訳すと、日本語
では倒置のような文章になることが多い。つまり和訳で「犬がパンを食べる」という文があるとすると、英語の原文
では「犬が食べるパンを」という語順になっている。だから全文が一行に収まっているなら、翻訳では日本語の語順
が尊重されるが、「食べる」と「パンを」の間で改行してあるなら、しかも次の行の冒頭に「パン」がくるなら、作者
は「パン」を強調しているのだから、日本語で普通の語順にするよりも、「パン」を強調することが優先される。つま
り「犬が食べる／パンを」と訳すべきなのだ。またまた訳し直しである。しかし、とにかく始めたからには終わらせ
る、と覚悟を決めて完成させたのだった。奇妙な日本語になったなと思うこともあったが、行の数を変えないように
気を付けた。なぜなら、それもまた作者の「作品」だからだ。

したがってこれは、詩の翻訳がはじめての素人の翻訳、「私はこう解釈しました」というものでしかない。それでも
原文を読んで感動したことは間違いなので、なにがしかの真実は受け取って、日本語に移し替えられたのではない
かと思っている。ツェランの詩集を読破したことが、多少なりとも役に立っていることを祈っている。

二〇二〇年 コロナ禍で動きのない名古屋の冬に

川島慶子

作者紹介

ロアルド・ホフマン (Roald Hoffmann)

コーネル大学名誉教授。化学者。ウッドワード・ホフマン則の発見により、1981年のノーベル化学賞を受賞。このときの共同受賞者が福井謙一で生涯の友人。詩人、劇作家、ライターでもあり、邦訳に、自身のホロコーストの経験を語った戯曲『これはあなたのもの』(川島慶子訳、アートデイズ、2017)がある。

川島慶子

名古屋工業大学工学研究科教授。科学史研究者。ジェンダーと科学についての研究を行う。『エミリー・デュ・シャトレとマリー・ラヴワジエ』(東京大学出版会、2005)で女性史青山なを賞受賞。『マリー・キュリーの挑戦』(トランスビュー、2010、2016改訂)他で山崎賞受賞。ホフマン作『これはあなたのもの』の翻訳者でもある。

東裏栄美

名古屋工業大学工学部機械工学科卒業。大学在学中に川島教授と知り合い、現在、事務補佐員として川島教授の元で働いている。また、イラストレーターとして活動中でもある。

初めまして。イラストを担当した東裏栄美といます。

この本は、最初は詩集ではなく、絵本にしよう、と動き出しました。そうか、絵本か…絵本といえば絵がメインだな。どんな絵を描こう？と何回も机に向かうものの、どうしても絵を描く気になれませんでした。もちろん、情景は浮かびます。私は何回も何回も屋根裏を思い浮かべ、自分が子供と一緒に屋根裏に潜んでいることを思います。私には子供が3人いて、3人とも30分も静かにしてられません。TVもない、スマホもない、ゲームもない、本が少しあるだけ！天井は低くて立ち上がれない、夜は明かりも付けられない。え!? トイレはどうするの!? そしてこう思うのです。「ああ、ダメだ。私とこの子達はとも15ヶ月もここで静かにじっとしてられない。」違う！そうじゃない、絵を描くんだっ…！とまあ、こんな感じで、ちっとも絵が描けません。

私の平和ボケした頭には絵本は無理です、と川島先生に泣きつき、詩集へと方向転換していきました。

しかし、詩集になってもイラストが入ります。川島先生に、イラストレーターなんだから描けるでしょ？と言われると、そうですね、多分描けます。と答えるしかありません。川島先生の名誉のために言っておきますが、先生は一度として私に無理強いはしませんでした。私はずっと、自分の心と戦っていただけです。はい。

初めに絵本の話が出てから2年以上も、私はのりくりりと絵を描かずにいましたが、ここへ来て急に「キレイでなくともいいか！」と聞き直り、詩集と向き合うこととなりました。こうして頭の中のモヤモヤをそのまま絵にしてみました。

私たちは、戦争のない時代に生まれ生活しています。こうやって、過去の悲惨な歴史と向き合うことが、これからも平和な世の中を作っていこうという原動力になると信じています。

川島先生、長い事ご迷惑をおかけしました。まだ絵を入れたものをホフマン氏に送っていないので、ドキドキしています。願わくば、ホフマン氏の頭の中の情景と少しでも重なるものがありますように。



ぼくとママは屋根裏に隠れた

2021年2月26日初版第一刷発行

2022年2月25日二版第一刷発行

著者 ロアルド・ホフマン

訳 川島慶子

絵 東裏栄美

発行者 『ぼくとママは屋根裏に隠れた』制作委員会

発行所 名古屋工業大学 川島慶子研究室
〒466-8555 愛知県名古屋市昭和区御器所町
kawashima.keiko@nitech.ac.jp

印刷 (株)荒川印刷

